

『九日目』、実話に基づく映画。 ナチスに抵抗する司祭

ダッハウの強制収容所にいたルクセンブルグの司祭、ヘンリー・クレメールは1942年2月、突然釈放された。神父はその収容所に1941年5月から収監されていた。ナチスの体制が反キリスト教的であると公に非難したかどで。実家に戻り家族と再会する。そこでこの釈放の本当の目的を知る。それは人道的な理由などではなかった。

ナチスは、大きな影響力をもっていたルクセンブルグの司教をいかにして教皇ピオ12世から離反させ、第三帝国を認める公式声明に署名させるか、その方策を模索していた。司教は自主的に司教館に閉じこもり侵入軍のいかなる代表者との面会を拒絶し、毎日甲いの印として教会の鐘を鳴らすよう定める。ゲシュタポの野心に満ちた警官の一人がクレメール神父を釈放したのだが、それは最近死去した母親の墓参りをさせるという口実の上であった。しかし、実際のねらいは、帰宅を許された九日間の中に神父が司教に例の公式声明に署名するように説得するということであった。

もしそれに成功しなければ、神父の家族と収容所での仲間の命はない。しかしもし司教が承諾すれば、クレメール神父は収容所から完全に釈放され、師の家族は国外に脱出でき、同僚の司祭たちの待遇も改善される・・・。

ダッハウの日記

『九日目』(Der neunte Tag)はドイツ人のフォルカー・シュレンドルフが監督をした映画であるが、ルクセンブルグの司祭ジャン・ベルナル(1907~1994)の実話をもとにしている。第二次大戦が終了すると、神父はダッハウ収容所での生活についての回想(日記形式の)を公刊した。その収容所には2771人の聖職者が投獄され、その半分はそこで命を失っている。

偶然であるが、ジャン・ベルナル神父は1947年には国際カトリック映画事務局の最初の事務長になったほど映画とは深い縁のある神父であった。

この映画の演出家たちは、ベルナル神父が自著できわめて言葉少なく(1ページ)語る事実から出発した。そこから、エバーハルト・ゲルナーとアンドレアス・フリーゲは神父がルクセンブルグで過ごす9日間の小説を書いた。ゲシュタポの警官は傲慢な合理論者で、神学校で学んだ知識を歪曲して、ヒトラーが天からの使者だと示そうとする背教者として描かれる。このナチスの警察と司祭との会話は演出家たちが想像したもので、非常にドラマチックな仕方で展開する。

このような自由な創作の線上で、映画の中では主役の司祭の名前もアンリー・クレメールとされた。この映画の醍醐味は、神父とゲシュタポとの間の対決で、ウルリッヒ・マテスとアウグスト・デールというドイツの指折りの俳優がこの二人を演じている。

シュレンドルフは、すべてのヨーロッパ人にとって「ナチスの人間が英語ではなくドイツ語で話すこと、よいドイツ人の像も悪役のナチスの像も、外国人に演じられるのではなく、ドイツ人によって演じられるものであることがきわめて重要である」と発言した。

(略)

この映画が生まれた経緯

シュレンドルフは次のように語る。「ベルナールの日記に最初から私は魅了された。すぐにそれは何か自分のためのものだと思えた。ナチスの強制収容所がどのようなものであったかを知らせることが自分にもできると初めて思った。私と同年代の多くの者たちと同様、私は強制収容所をあるがままに描くなんてことはできない相談だとずっと考えていた。この本は、実際にそこにいた人によって、精確かつ簡素に、悲壮感のかけらもなしに書かれている。ベルナル神父がこの本を書いたのは1945年のことだが、その時にはこの苦しい体験を一定の距離を置いて眺めることができた。このことが私の心を揺さぶった。師の本を読みながらその情景を想像するだけで、心が押しつぶされるように感じた。暗い映画になることは間違いないと思ったが、作ってみようと思えた。

ベルナル神父は、まるでヘミングウェイのような仕方、つまり目にしたことをありのままに書くという仕方です。日記を綴った。この上なく精確に写実的な仕方、まるで風景を描写でもするかのように。神父はそれを文学にする気などまったくなかった。このことに私はひどく興味を引かれた。

監督として私がこの映画で成功したと思うところは収容所の内部の描写である。それは不可能事だと思っていたことだ。かつて私は収容所やホロコーストに関するプロジェクトに誘われてもいつも断ってきた。それらはフィクションや演劇には手におえないものだと思って。しかし、師の日記の助けで、これらを生き生きと表現することに成功したと考えている。」

上述のとおり、ルクセンブルグでの9日間は日記の中ではほんのわずかな部分しか占めていない。日記の中心は収容所での生活にある。なぜこの映画のディレクターたちはこの9日間に注意を向けたのだろう。「私に靈感を与えたのは、神父が『おまえは自由だ』と告げられた瞬間だ。と言うのは、まさにその時彼は自分の生死を決定するのは自分自身だと悟ったからだ。その時までには、その決定権は収容所の監督たちの手にあった。が、突然自分にこの決定を任せられたのだ。いつも私は、確固たる信念を持ち自分がとるべき行動についてひとかけらの疑念もなく前進する人たちに憧れていた。

この神父は、人は信仰によってすべてが明らかになるのではないが、信仰が重大な決意をすることを可能にしてくれると知っている。私はこのことを言葉で表現するのではなく、映画を見た人が気付いてくれることを望んだ。それは言葉では表せない何かだから。」

知られざる英雄たち

何度となく議論されてきたことの一つに、なぜピオ12世はユダヤ人虐殺をもっと毅然とした態度で断罪しなかったのかという問題がある。

「根拠のあるなしは別にして、教会の態度に対する多くの批判があるが、最善の仕方での状況を生きた人が無数にいることを忘れてはならない。私はこれらの知られざる英雄全員に敬意を表したかった。このことについて議論の余地はないと思う。」

シュレンドルフは映画にも出てくる低地地方で起きた出来事をコメントして、教皇ピオ12世の沈黙について説明を加える。「あそこで、ナチスは最初オランダのユダヤ人を逮捕し連行した。オランダの司教たちがそれについて抗議すると、ナチスは報復としてカトリックに改宗したオランダのユダヤ人を逮捕し連行したのだ。」

ルクセンブルグの司教の態度については、映画の監督によれば、「司教はまったく正直な人物

で、議論を巻き起こす。単に『私は司教館に引き籠もり、私が外で起っていることに賛成していないことを表すために鐘を鳴らさせる』と言う。そしてその他は何もせず、自分の秘書が汚い仕事をするを黙認する。この状態は混乱そのものだ。(中略)。いずれにしても、この種の議論に立ち入る気はなかった。と言うのは、そんなことをしたら、私の神父の話は焦点がぼけるからだ。私には組織としての教会は興味がなく、個人としての司祭を見たかった。(略)』

20世紀のドイツにおける殉教史の調査を担当しているヘルムート・モル神父の意見では、「この映画は、あの時代を生きた人の証言をもとに、時代の真実の姿を伝えている。主役たちの素晴らしい演技のおかげで、見ているものをあの時代に引き込み、キリスト教と国家社会主義(ナチス)が歴史的かつ思想的な闘争を繰り広げていたことを教えてくれる。(略)」

ベルリンの大司教ゲオルグ・ストルツィンスキーは、シュレンドルフの「メッセージは時間を超えている。と言うのは、今日も困難な決定を迫られることがあるからだ。たとえ、それが『九日目』のような生死を分けるようなものではないにしても、多くの人にこの映画を薦めたい」とコメントしている。

* * * * *

シュレンドルフのプロファイル

フォルカー・シュレンドルフ(1939年生まれ)は少年時代に家族とともにパリに移り住む。プロテスタントであったが、両親は休暇中にそこでフランス語を学ばせようと、彼をブルターニュにあったイエズス会の寄宿舎に入れた。彼は寄宿舎の雰囲気気に入って、そこで3年過ごした。

高等学校を終えるとソルボンヌ大学の政治経済学部に入ったが、そこで映画技術も学んだ。

彼の映画界での職歴は、1960年代に、アラン・レネ、ルイ・マル、ジャン・ピエール・メルヴィルらの助手をしたことから始まる。ローベルト・ムジールの小説を映画化した『テルレスの青春』(1966)が、彼が手がけた最初の長編映画で、カンヌ映画祭の受賞作品となった。女優で演出家のマルガレーテ・フォン・トロッタと結婚し、夫婦で多くの企画に携わった。1979年にはギュンター・グラスの小説を映画化した反戦もの、『ブリキの太鼓』でカンヌの金賞、非英語映画の最良の作品に与えられるオスカーの賞をとった。

(中略)

映画監督としての仕事をするようになったそもそもの始まりとして、シュレンドルフは次のように言う。「私が勉強したイエズス会の学校には映画クラブがあった。そこで初めて無声映画を見た。Dreyerの『ジャンヌ・ダルクの受難』だ。私が印象を受けたのは、映画のストーリーというより、主人公が一言発するだけで自由になれるという瞬間に彼女が火刑になることを選ぶ場面だった。それを見て私は自問した。『自分がすべきことについて、これほどの確信をもてるのはなぜか』と。そして、50年後この台本を読んでいて、そのときの質問を再び思い出した。相変わらず答えはないのだが。」

シュレンドルフはあの学校の先生たちに恩を負っていることを認める。「あのイエズス会士たちは、私に弁護士や医師や建築家、あるいは私が属していた中流階級の間人がよく従事するその他の職種になる必要はない、ということを知らせてくれた。当時は50年代で映画監督という仕事はそれほど評価されていなかったが、こう言ってくれたのだ。『君はそんなに映画が好きなら、映画監督を目指したらどうだね。』彼らが物事を議論するときの明晰さが私は好きだった。またいつも真理を見つけようとするその態度も。彼らは私の人生をすっかり良い方向に向けて

くれた。教育とは何かとても素晴らしいことであると発見した。私は映画を作るときも、この見解を持ちつづけている。映画を作るたびにお金を失っているけれど。」

シュレンドルフはカトリックの教えが自分の人生に大きな影響を与えたことを認めるが、改宗する決意はしなかった。「この決心はきわめてプライベートなことだ。私は自分の娘に洗礼を受け、カトリックの教育を受けることを許した。しかしながら、私はまったく改宗する気はない。私は霊的なものを信じる。またこの西欧世界において、カトリックの信仰がプロテスタントよりももっと意味を持っているように思う。」

ACEPRENSA, 11~17 - I - 2006, 1/06